

## オーディオ実験室収載

### バッハ盤を聴く(10)(HP 収載) —最新アナログシステムでの試聴(10)—

#### 1. 始めに

前報(9)に引き続き、バッハのアナログ盤を聴き直していきます。

#### 2. バッハのアナログ盤の試聴方法

試聴システムは LINN LP-12 の再構成(35)および ThorensTD124 の再構成(1)で報告したとおりであり、今回は LINN LP-12 で聴いていきます。その後、さらにアンチスタティックの効果(1)とアンチスタティックの効果(2)で報告したようにレコードアンチスタティックも加わり、今回も、スピーカーアキュライザーの出力側のマイナス端子に Crstal EpY-G をセットしています。

今回は、次のレーベルを聴いてみます。

##### Columbia NCC-8502-N

J.S.バッハ クラブサンとオーボエのための協奏曲ニ短調 BWV1059

6 声のリチェルカーレ BWV1079

ヴァイリンとオーボエのための協奏曲ニ短調 BWV1060

ジャン・フランソワ・パイヤール指揮室内パイヤール管弦楽団」

##### Columbia RE-1511~12-MU

J.S.バッハ フーガの技法

カール・リステンバルト指揮ザール室内管弦楽団

##### DENON OX-7041-ND

J.S.バッハ アリオーソ

ヤノーシュシュタルケル (チェロ)

岩崎淑 (ピアノ)

#### 3. バッハのアナログ盤の試聴結果

Columbia 盤は、ZANDEN のリストでは、Columbia、R、第 4 時定数 Low となっています。

DENON 盤は、ZANDEN のリストでは、Columbia、R、第 4 時定数 Low となっています。

Columbia 盤のバッハのクラブサンとオーボエのための協奏曲、6 声のリチェルカーレ、ヴァイリンとオーボエのための協奏曲など、お馴染みの曲で 1972 年東京でのライブ収録で PCM 録音です。Columbia、R、第 4 時定数 Low で聴いていきましたが、

違和感はなく、初期の PCM 録音で音は固めですが、パイヤールらしい、明るく華やかなバッハです。

Columbia 盤のバッハのフーガの技法は、Columbia、R、第 4 時定数 Low で聴いていきましたが、違和感はなく、パイヤール盤と違って、ゆったり目のテンポで、しみじみとした演奏です。

DENON 盤のバッハのアリオートは、原曲はチェンバロ協奏曲第 5 番へ短調 BWV1056 の第 2 楽章 Largo とのこと、アリオートとは歌うようにという意味で、バッハの G 線上のアリアに通ずるところがあります。Columbia、R、第 4 時定数 Low で聴いていきましたが、違和感はなく、ゆったり目のテンポで流しています。DENON の 1975 年の PCM 録音ですが、滑らかなチェロの音です。

#### 4. まとめ

LINN LP-12 の再構成(35)とアンチスタティックの効果(1)の結果をトレースでき、レーベルのイコライザー特性が特定できました。

以上